
ボディガードは魔法少女

建御雷神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボディーガードは魔法少女

【Nコード】

N7335X

【作者名】

建御雷神

【あらすじ】

7月27日、明日から夏休みという事で浮かれていた俺こと、高校2年生の真之乃秀まののしゅうの前に謎の金髪碧眼のツインテールの少女が現れた。自分は未来からやってきたというトンデモ設定を語る少女は更に自分の事を『トップソーサレス上級魔術師』。つまりは、“魔法少女”だと言う。色んな設定が混じっているようなそいつは更に俺に対してトンデモ発言をしてきて。

7月27日

「夏休み、どうする?」

「あん?」

7月27日 高校の終業式からの帰り道にて。

腰の辺りまである艶やかな黒髪が特徴の少女 夜華霧歌は俺にそんな事を問いかけてきた。

「どうするって……明日から否応無しにやってくる夏休みに対して今の心境を語ればいいのか?」

「私がそんな捻くれた答を待ち望んでいると思う?」

「いや、全く以て思わないな」

「そう思うのなら、そんな事は言わない事、良い?」

「は、ハイ……いや、その、ちよつと明日からの夏休みに浮かれててさ。ちよつとした悪ふざけを敢行しようと思いついたから」

「全くもう……秀ちゃんはいつまで経ってもそういう所だけは変わらないんだから」

そう言つて 俺の隣を歩く霧歌はぶうつと不満気に頬を小さく膨らませる。

夜華霧歌　　彼女は一言で言うなら、俺の幼馴染だ。

彼女とは幼稚園の頃からの付き合いで、その後は小学校、中学校、そして今の高校と　　ずっと共に歩みを進めている。

もしかすると、このまま二人でハッピーエンドまで到達してしまうのではないか。

余りにも歩む道が同じ過ぎて俺は時折そんな事を考えてしまうのだが。

まあ、そんな事は無いのだろう。

だって、僕は単なる平凡な学生で、彼女は生徒会の副会長も務めていて、学校では常に成績がトップのエリートだからだ。

同じ道を歩んでいても、互いに起きる変化は言うまでも無く大きく違う。

嫌になってくる程に　　違っている。

昔、一緒に遊んでいた男女　　その内の男子が平凡になって、その内の女子がエリートになる。

よくある話だ。

そして、大概はその後に二人を待ち構えているのは困難を乗り越えた先にあるハッピーエンドなのだが　　。

今の所、ハッピーエンドの兆しどころか、困難さえ俺達の目の前に

立ちはだかる気配は感じられない。

非常に残念だ。

いや、冗談抜きで。

「ねえ、秀ちゃん」

「あんな、霧歌……その呼び方、中学の時にはもう止めてくれて俺何度も頼まなかったっけ？」

「アレ？ そうだったかな？」

そうだったかな、じゃねーよ。

女子なら未だしも、男子が女子からあだ名で呼ばれるという事に何かしらの抵抗の意思を俺が見せ始めたのは中学校に入ってからだ。

そこで、俺は霧歌に土下座までしてそのあだ名を止めてくれるように頼んだのである。

「忘れたとは言わせねーぞ。俺なんかお前の前で土下座までして見せたんだからな」

「過去を勝手に改竄かいざんするのは止めてよ……秀ちゃん、私に土下座なんてしてないよ？」

「……………」

どうやら、土下座まではしていなかったらしい。

それはそれで安心した。

何と言うか……男としてのプライドが護られたような気がする。

「とにかく、俺の事をもうあだ名で呼ぶのは止せ」

「えーっ、何でよー。可愛いよ？ あだ名」

「男に可愛さなんて要らない」

「それはおかしいよ……何かこう、女尊男卑じょそんだんひみたいな」

「難しい言葉を使って誤魔化そうとするな。そんな言葉、見た事も聞いた事も無いぞ。男尊女卑だんそんじょひなら知っているが」

「……秀ちゃん、女尊男卑は今の日本を語る為の、男尊女卑に変わる四字熟語だよ？」

「……………」

……時折、無知は俺に“羞恥”という贈り物をくれる。

いや、好きで貰っている訳では無いのだが。

「あ、揚げ足を取りやがって……………」

「秀ちゃんがもつとちゃんと勉強すれば良い話じゃない」

「ふざけるな。俺は勉強なんかしない」

「高校生が言う言葉じゃないねえ……」

呆れたように苦笑を見せる霧歌。

「夏休み明けには実力テストがあるんだよ？」

「知ってるよ。夏休み明けには忘れているだろうけど」

「秀ちゃん、夏休み明けにあるテストを夏休み明けには忘れていて、かなり危ない事だという事に気付いてる？」

「とにかく、俺は勉強なんかしねーよ。来年もあるし、来年一年間頑張ればどっかの大学くらい受かるだろ」

「そういう安易な考えが足を突き崩すんだよ……秀ちゃん。仕方ないなあ……それじゃあ、夏休みの何日間か私が個人レッスンして上げるから、頑張らない？」

「こ、個人レッスンってお前……俺達、まだ高校生だぜ？」

「……秀ちゃん」

「ハイ」

「怒るよ」

「……申し訳ありませんでした」

俺は素直に謝った。平謝りをした。

今のは完全に悪ノリをした俺が悪い。

いや 悪ノリをしている時点で悪いのはどう考えても俺なのだが。

7月27日？

「それで、話は元に戻るけど……夏休みはどうする？ 私と一緒に勉強する？」

「夏休みにお勉強、ねえ……」

「物凄く嫌そうな顔だね……まあ、解ってはいたけどさ」

再度、俺の顔を見て苦笑を見せる霧歌。

ていうか、顔を見られて苦笑を浮かべられるというのもどうなのだろうか。

「そうだなあ……まあ、気が向いたらお願いしようかな」

「おつ、普段の秀ちゃんに似合わず前向きな考えだね」

「オイ、それは一体全体どういう意味だ」

今の言葉だけで俺は“前向き”だと捉えられてしまうのか。

それじゃあ、普段の俺はどれだけ“後向き”な人間だと言うのだ。

「まあでも、私と一緒に勉強会した方が秀ちゃんも得だと思うよ？」

「えっ、何で？」

「秀ちゃん、今日夏休みの宿題貰ったでしょ？」

「ああ、そういえばそんなものも貰ったっけ……一瞬、現実逃避しようとして教室のゴミ箱に捨てそうになったけど」

「……秀ちゃん、あなたは一体どれだけ勉強というものが嫌いなのですか？」

「戦争や紛争、その中で死んで行く子供達　そんな感じの現実と同じくらいに嫌いだな」

「なるほど……秀ちゃんがどれくらい勉強というものが嫌いなのが理解できた」

「それで、どうしてお前と一緒に勉強会した方が俺にとって得なんだ？」

「だって、解らない所は一緒に考えられるでしょ？」

「なるほど、確かに……解らない所は霧歌から写して貰えば良いし」

「解らない所は一緒に考えられる、でしょ？」

「……ハイ、そうですね」

……霧歌は俺の言葉を遮る勢いでこちらに眼前まで顔を近づけつつ半ば俺を脅すようにそう言うのだった。

つか、怖いよ、霧歌。

今はマジで怖かったよ。

「それに……秀ちゃんと一緒に居られる時間も増える、し

「あん？ 今何が言った？」

「う、ううん……何でも、ないの、何でも」

「そうか……それならいいけど」

今、霧歌が何か口走ったような気がしたんだけど……空耳だったか。

「それじゃあ、早速明日から勉強会を決行しましょうか」

「明日から!？」

余りの急ピッチな予定に俺は思わず叫び声を上げてしまっていた。

俺達の通う高校は住宅街の傍にあつて、無論今も俺達は住宅街の中にある帰路を使っている為 もしかしたら、家の中に居る主婦や子供達に声を聞かれてしまったかも知れない。

「あ、明日から、って、お前……幾ら何でも早過ぎるだろ」

「そうかな……私はいつもそうしてるけど？」

「あんな、エリートのお前の日常を平凡な俺に押し付けられても困るんだよ」

お前の日常はお前にとって日常であり、俺にとっては非日常だから

な。

天と地、月とスッポンくらいに違うのだ　　過ぎている時間は同じでも。

「エリートって……私は別にエリートでも何でも無いよ」

「お前をエリートと呼ばずして他に何と呼べと言っただよ。頭脳明晰で成績優秀　　そんなお前がエリートという呼ばれ方を嫌うのなら今日から俺はお前の事を『エリート・ウーマン　霧歌』と呼ぶぞ」

「うーん……別にカッコイイからそれでも良いけど」

「マジで言ってるのかお前！」

しまった……霧歌のこういうネーミングセンスが壊滅している事をすっかり忘れていた。

壊滅しているというか、荒廃しているというか、崩壊しているというか、何だろう。

とにかく、霧歌のこういうったセンスは酷いのだ。

それを考慮するなら、“秀ちゃん”というあだ名はまだマシなのかも知れない。

……いや、だからと言ってそのあだ名を認める訳では無いが。

「ていうか、夏休みの初日から宿題をする私を秀ちゃんは“エリート”って呼ぶけど……あつ、『エリート・ウーマン　霧歌』だっけ

「？」

「言うな。そのあだ名はもう忘れる」

何か俺が恥ずかしくなる。

くそっ……霧歌を辱める為に作り上げたあだ名でどうして俺が羞恥で悶えないといけないんだ。

何かまた揚げ足を取られているような気がする。

気のせいだろうか。

気のせいであって欲しい。

「それ自体は別段“エリート”って訳じゃないのよ？ 夏休みの初日から宿題をする人くらい、たくさん沢山居るし」

「それって本当なのか……？ 夏休みの宿題を夏休みの最終日辺りに全て片付けている俺にとってはお前達の考えは解らないな」

「ていうか、秀ちゃんって毎回夏休みの宿題は最終日まで全く手を付けない人だったんだね……まあ、そこはあえて今はツッコまないけどさ」

「大体」と霧歌は人差し指を立てて説明口調で続ける。

「夏休みの初日から一週間以内に宿題を全て終わらせたなら、それ以降は夏休みが終わるまでずっと宿題の事なんか気にせず遊べるんだよ？ そっちの方が得だと思わない？」

「……あのな、霧歌？」

「うん、何？」

「お前に良い事を教えてやるよ」

「良い事？」

「俺みたいな宿題を最終日まで全く手を付けない奴って言うのはな、まず、夏休みが始まった瞬間から宿題という“存在”そのものを頭の中から消してしまっているんだよ。だから、夏休みが始まって一週間以内に宿題を終わらせた方が得　なんて考えさえ、最初から俺の頭の中には入っていないという訳なのさ。解ったかい？」

「それは解ったけど……あの、そういう事を何か得意気に語られても私困るんだけど」

「でもまあ、夏休み中は何度かお前に宿題を写させて　いや、一緒に考えさせて頂こうかな、うん」

その言葉を言い切る途中で俺は霧歌から鋭い視線で睨まれたので
ほぼ条件反射で台詞を言い直した。

「……まあ、秀ちゃんが来てくれるのなら、もう何でも良いかなあ」

「えっ、それじゃあ宿題を　」

「写させませんから安心して下さい」

「……………」

「どうやら、どうあっても霧歌は俺に宿題を写させる気は無いらしかった。」

「つか、安心して下さいって。逆に安心できねーよ。」

「不安だ……難問にぶち当たったら、その問題で一日の貴重な時間を費やしてしまいそうな気がする。」

7月27日？

「仕方ない……宿題の件はそういう事にしておくか」

「何で上から目線なのよ」

「ていうか、霧歌。ちょっと脈絡も無い話をしてもいいか？」

「脈絡も無い話という時点で何かアレだけど……まあいいわ、どうぞ、秀ちゃん」

「夜華霧歌って名前……何か、物凄くレアな感じだよな」

「本当に脈絡も無い話ね……」

「何だよ、ちゃんと話す前に“脈絡が無い”って俺は言ったぞ」

「まあ良いけど……そうね、『夜華霧歌』確かに珍しい名前よね。苗字も、名前も……まあ、そういう所を実は気に入ったりしているんだけど」

「その点については俺も同感だな。『夜華霧歌』って……何か、カッコイイ名前だよな」

「でも、珍しい名前と言えば、秀ちゃんの名前だってそうだよな？」

「えっ、そうか？」

「そうよ。真之乃秀なんて……名前はともかく、苗字は珍し過ぎる

ほどに珍しいわよ」

「うーん……そうか？ 俺は今までこの苗字だったから、そこまで珍しいとも思わなかったけどな」

「ポケモンで言うなら、草むらから色違いポケモンが出て来るくらいにレアだと思っな」

「止める、霧歌。その例えだけは止めてくれ」

何か色々と危ない気がする。ていうか、その例えは確実に危ない。

「しかし、そうか……お前の例えが当たっているのなら、俺の名前と言っより、苗字は中々に珍しいものだったんだな、今更ながら気付いてしまったぜ」

「この世に生を受けて17年 大きな発見だね、秀ちゃん」

「おうよ、やったぜ、霧歌」

「やっぱり、その嬉しさは色違いが草むらから出て来たくらいに嬉しいの？」

「だから、その例えは止めてくれて言ってんだろ。いや、まあ、そのくらいに嬉しいかも知れんが」

「でも、色違いと言えば、最近やってないなあ……黒と白が出たけど、ちよっと熱中したら全クリしちゃったし」

「……霧歌、お前さっきから発言が色々ギリギリだぞ」

「秀ちゃんは黒白どっち派？」

「お前、さり気無く俺の事も巻き込もうとしているだろ」

「良いから、答えてよ、秀ちゃん」

「俺は……白だな、ていうか、白以外には考えられないな」

まあ、白以外には黒しかもう選択肢は無いのだけれど。

「黒って何か……ほら、伝説がゴツゴツしてるって言うかさ」

「えーっ、でもネーミングに関してはこっちの黒の方が上だと思うなー」

誰もお前にだけはネーミングの事を言われたくは無いと思う　そう思う俺だったが、決して口には出さない。

口に出せば、霧歌が怒るか、もしくは凹んでしまふ事間違いないからだ。

「ほら、カツコ良くない？　ゼクロ」

「わ　　っ！　言うな！　何言ってるんだお前！　バカかお前！」

「秀ちゃんにバカだと言われる日が来るんなんで……何か心外だなあ」

「いや、お前バカだろ！ 実はバカだろ！ エリートと見せかけて
実はバカなんだろ！」

「私はバカじゃないし、そもそもエリートでも無いよ、秀ちゃん。
ていうか、バカって言う方がバカなんだよーだ」

そう言っつて霧歌は俺に舌を出してくる。

典型的な相手を挑発する行為の一つだ。

しかし まあ、何と言うか、霧歌がやると長髪で苛々する以前に
何か萌え ゴホン、いや、俺は何も言っていない。

別に、霧歌が俺に向かってべーっとな舌を出してきたとしても、俺は
その行為に対して“萌え”を感じたりはしないし、心に何かキユン
と来るものを感じたりもしない。

本当だから。

いや、冗談抜きでこれは本当だから。

可愛いとは思っただけれども。

.....。

「.....秀ちゃん？」

「は、ハイッ？」

「今、何か私に対して邪まがな想像と言うか、感情を抱かなかった？」

ば、バレてる！？

何だこいつ、まさか霧歌には人の心を読む力があると言うのか！

「……そ、そんな訳ないじゃん。俺がお前に対して邪な想像とか感情を抱くなんて……なあ？ 知ってるか？ 俺って、家の中では『善意の塊』って呼ばれてるんだぜ？」

「へーっ、それはまた狭い範囲の中での通り名だね、秀ちゃん、私見直しちゃった」

「そ、そうだろう？ どうせなら、もっともっと尊敬してくれても構わないぜ？」

「……秀ちゃん」

「何だ？」

「余り調子に乗ると怒って、それから……」

「何でそこで言葉を区切るの！？ なあ、お前が怒った後にはどんな壮絶な仕打ちが俺に待ち受けているんだよ！」

聞きたくはないけど逆に気になって仕方が無い！

「あつ、気付けばもういつもの分かれ道だね」

霧歌の言う通り、気付けば俺達の前には左右に分かれたT字路があった。

ここで、いつも俺達は別れる。

霧歌は右の道に、俺は左の道に。

それぞれ 別れて、歩いて行く。

「それじゃあね、秀ちゃん」

「おう、霧歌」

「帰ってからまた、メールするからね」

「ああ、明日の打ち合わせだろ？ 待ってるよ」

「うん」と霧歌は何故か嬉しそうに満面の笑みを俺に見せて。

「じゃあね、秀ちゃん」

そう言っただけに大きく手を振った霧歌は 俺に背を向けて自身の
帰路を歩き始める。

「……さてと」

そして、帰路を歩いて行く霧歌を暫しの間見送った俺も自身の帰路
をゆったりとマイペースに歩き始める。

どうせ、明日からは夏休みだ。

実質、終業式が終わった今日から既に夏休みは始まっていると言っ

ても良い。

それ以前に急ぐ用事も無いし 時間もある。

だから、ゆっくりと家に帰ろうと思った矢先だった。

「……………ん？」

俺は地面に落ちていた“それ”を蹴飛ばしてしまった。

俺に蹴飛ばされた“それ”はアスファルトの上を滑空し 　それが
ら、ガチャンという金属音を立てて道路の上に落下した。

7月27日？

「何だ、あれは……？」

俺はそう疑問の声を漏らしながらも、その蹴飛ばしてしまった“それ”に歩み寄り、“それ”を拾い上げる。

俺が蹴飛ばしてしまったもの　　ペンのような形をした白い物体だった。

いや、ペンのような形をしているとは言っても実際にはペンではないのだが。

ペンではなく　　“それ”は何かの欠片に見えた。

ペンに近い形状をした何かの、欠片。

“それ”を僕は拾い上げたのだ。

「宝石……じゃあ、ない、よな？」

誰にでも無くそう確認を取る俺。

無論、俺は先ほど霧歌と別れたばかりであり、周囲には誰も居ない為、その問いに対する回答は幾ら待っても帰って来ない。

そして、俺がそんな問いかけをしてしまった理由は　　ただ一つ。

その白い何かの欠片がキラキラと　　太陽の光に反射してまるで宝

石のように煌びやかに光っていたからだ。

いや、ていうか、最早これは宝石なのではないだろうか？

「……………」

えっ、どうしよう。

この場合……交番に届けた方が、いいのか？

交番に届けた場合、その落とし物を拾ってくれた人には何割かお礼が貰える制度があったような気がする。

いや、お礼が欲しいが為に交番に届けるんじゃないぞ？

ただ純粹に、純粹に落とし主の事を思つての行動だからな？

勘違いしないように。

「……………」

そして。

周囲の景色と、たった今拾い上げた宝石のような白い何かの欠片を
何度も　何度も、何度も見比べて。

俺は。

突然だが、ここで余談を一つしておく事にしよう。

俺の家は二階建ての一軒家である。

そして、俺の部屋はその一軒家の二階にあった。

俺の部屋にあるベランダに出る為の窓からは住宅街の屋根の海が一望できて　それはそれで俺はその景色を少し気に入っていたりする。

時が流れて、夕刻になれば外から暖かな茜色の光が差し込んで来て外に広がる景色は一層幻想的なものへと変化する。

無論、俺の部屋にも窓からその光が差し込んでくる。

今は夏なので少しばかり暑い気もするが　それを気にしないほどに、俺は夕暮れ時の太陽が放つ茜色の光が好きだった。

そして。

現在、時は夕刻。

今日もベランダに通じる大窓から太陽の光が部屋の中に差し込んでいる。

壁、床、ベッド、パソコン　色々なものが茜色の光に染まっている中で。

俺の勉強机の上に置かれたその宝石のような白い何かの欠片もキラキラと神々しい光を放っていた。

「……………」

…………… ああ、そうだよ。

結局、持ち帰って来てしまったのだ。

何とか夕暮れ時の茜色の光だとか、その辺りの素晴らしい風景で誤魔化そうかと思っただが　　どうも、上手く行かなかったようだ。

幾ら現実逃避をしようとして目を逸らそうにも、実際に俺の勉強机の上には先ほど持ち帰った白い何かの欠片が置かれているのだから。

「ヤバい……………何かヤバい代物だったらどうしよう……………！」

俺はまるで土下座するかの如くベッドの上で小さく蹲すわりながら恐怖おのに慄おそく。

「ヤバい……………何か、マフィアとかヤクザとか、その辺りの人達の所有物だったらどうしよう……………！」

その可能性も決して否めない訳では無い。

あんなにキラキラと輝く美しいものだ　　そういう裏の人間達の所有物だったとしたら。

俺の人生はもう、終わりだ。

「ヤバイ……質屋で高値で売ってしまったらどうしよう、100万とか」

そもそも、質屋とはそういう金額も出してくれるのだろうか。

俺は実際行った事無いから解らないけれど……ドラマとか、その辺の知識からすればそんな値段を出した所は一度として拝見した事が無い。

「ヤバイ……宝石店で物凄く高値で売ってしまったらどうしよう、1億円とか」

もう、あれだ、1億円とかで売ってしまった暁には俺はもう高校を止めて、大学にも行かなくて、勉強せずとも人生を満喫。

……。

「って、俺途中からこの謎の物体を売る前提で話を進めてるじゃん！ 恐怖に怯えている俺は一体全体どこに行ってしまったんだよ！」

そんな感じで俺はベッドから勢い良く起き上がると全力でノリツツコミをした。

自分でボケて、自分でツツコんで、一つだけ解った大切な事が有る。

それは。

「……空しくなるだけだったな」

空しくなるだけだった。

悲しくなるだけだった。

心に一生モノの傷が入るだけだった。

もう二度と一人ボケ、ノリツッコミはしないでおう
心に固く誓った。 俺はそう

7月27日？

「ってオイ、違っだろう」

言っている傍からノリツツコミをしまっている俺であるが、そこは華麗にスルーして欲しい。

問題なのは、この謎の物体の正体だ。

本当にこれは一体全体何なのか？

俺の予想通り、これは宝石の類なのか？

宝石の類なら、これは質屋や宝石店で売れるのだろうか　　って違
う、そうじゃなくて。

「……何なんだろうな、これ」

宝石　と、一概に思おうと思えば、俺はその物体を宝石と認識する事が出来ただろう。

しかし。

何かが、違う気がしたのだ。

どうしてそう思ったのかは解らない　　どうしてそう言い切れたのか、その自信がどこから来たものかも解らない。

ただ。

その白い何かの欠片は “宝石” ではない。

何故か、俺はそう思う事が出来た。

誰かにこれが何なのかと問われれば、正体は解らなくとも、とりあえず “宝石ではない” と俺は答える事が出来ただろう。

そして。

ピンポーン、と。

不意に家のインターホンが鳴り響いたのだ。

「あっ、ハイ」

俺はそのインターホンに つい、いつものように応対してしまっ
た。

どうして、もう少し細かく考えなかったのか。

この謎の物体を手に入れた直後にこの家を訪ねてくる者であるのに
も関わらず。

しかし。

インターホンが鳴るといふ事はつまり、この家に客人が訪れた事。

インターホンを “そういう風” に認識してしまっている俺は殆ど条
件反射で立ち上がり、ベッドから下りて、部屋を出ると、一階へと

足を運んだ。

それから、俺は玄関に辿り着くと、扉の鍵を解除して。

「ハーイ、どちら様？」

そう言いながら　俺は玄関扉を押し開ける。

玄関に射し込んでくる茜色の光。

扉の向こう側　我が真之乃家の玄関には変わった客人　もとい、少女の姿があった。

背丈は俺と同じくらいで、紅のライダースーツのようなぴっちりとしたものを身に纏っていた。

肩や膝、そして手首に装着しているのは何かの防具だろうか　何が見慣れない機械のようなものにも見えるが。

そして。

その格好こそ珍しかったが　俺の目を引いたのはその少女の“髪の色”。

少女の髪の色は金色、だった。

真っ直ぐに切り揃えられた前髪、後ろ髪は二つに分けて結ばれている　いわゆる、ツインテールというヤツだろう。

「……………」

俺は目の前に現れたその少女に言葉を無くす。

それから、対する少女は俺の姿を見てニツと笑みを見せると。

こう言った。

「……あなた、真之乃秀よね」

その少女の言葉は最後まで俺の耳には届かなかった。

何故なら、俺が玄関扉を勢い良く閉めたからだ。

それならば、何故扉を閉めたのか　そう問われてみるとこれと言った理由は浮かんで来ない。

強いて理由を挙げるとするなら　そうだな、本能的なもの？

だって、よく考えてみるよ。

突然目の前に現れた不思議な雰囲気を漂わせる少女がどういいう訳か俺の名前を知っているんだぜ？

もう本能的に閉め出すしかないだろうよ。

嫌な予感しかしねーよ。

「……さて、と……今日の晩御飯は何にするかなあー」

「ってちよっと！　何で閉め出すのよ！　意味解んない！」

俺の後ろで扉が開く音が聞こえたと思えば、それとほぼ同時に先ほどの金髪の少女のものと思われる怒声が飛んできた。

俺は憂鬱な気分で後ろを振り返る。

やはり、先ほどの金髪の少女は有ろう事か家の玄関扉を勝手に開けて玄関に足を踏み入れていた。

「オイコラ、お前」

「お前って呼ばないで！ ちゃんと名前で呼んでよ！」

「いや、俺お前の名前知らないし」

「フンツ！ 私だってあなたなんかに教える名前なんか持ち合わせていないわよ！」

「お前、言葉が支離滅裂になってるぞ！？」

俺に名前を呼ばたいのか、それとも呼ばせたくないのか、どっちなんだよ。

「いや、それ以前に、何でお前人の家に勝手に入って来てるんだ。お前はさっき門前払いをしたはずだろうが」

「ていうか、それ以前にどうして私の門前払いしたのか、理由を聞かせて貰いましょうか！」

「怪しかったから、以上」

「理由が簡易過ぎる！ ていうか、一目見ただけで私が怪しい人物なのかどうか見抜ける訳がないでしょ！ 常識的に考えて！」

「解るよ、解るに決まってるんだろ。突然現れた見知らぬ金髪の女性が俺の名前を何故か知っていた、これだけでお前は十分に、いや、十二分に怪しい奴だよ」

「解らないじゃない！ ただ単にあなたの事を好き好んで日々ストーキングしている可愛い女の子かもしれないじゃない！」

「ただのストーカーじゃねーか！」

「誰がストーカーよ！」

「いや、お前が言ったんだろ！？」

何だよ、こいつ……超遣り辛いんだが。

「それで、お前の用件は何だよ。何の為にここに来たんだ。まさかガチでストーカーじゃないだろうな」

「自惚はなぶれてんじゃないわよ。あなた、まさか自分がストーカーされるようなモテモテな人だって誤認しているんじゃないでしょうね」

「……………」

明らかに罵られた訳だが 何だろう。

返す言葉が見付からなかった。

というより、何だか、穴があったら入りたい気分とてつに途轍もなく襲われた。

「……最後に確認を取るけど、アンタが真之乃秀　で、良いのよね？」

「ああ、そうだけど……お前は？」

「私の名前は　ウリアルル＝ブレイザー。あなたに会いに来たの」

「俺に会いに……？　何だ、告白でもしに来たのか？」

「あなた、次に話を逸らしたら殺してやるからね」

「……………」

何か、物凄い形相で凄まじい脅し文句を言われた。

「冗談だったのに……」。

「……俺に会いに来たって、用件は何だよ」

「……あなたを“護る”為よ、真之乃秀」

「俺を護る　って、一体何から？」

「私達の、敵から」

「俺達の……敵？」

「ええ、そう」と金髪の少女　ウリアルル「ブレイザーは頷いて。
俺に対してこんなトンデモ発言を放ったのだった。

「私はあなたを護る為に未来からやってきた」トッブソーサレス「上級魔術師」　魔
法少女よ」

上級魔術師

時計の秒針が時を刻む音が一定のリズムで部屋に響く。

俺は腕組みをした状態で部屋の机の椅子に堂々とした姿で座っていた。

「……もうそろそろか」

俺は部屋の時計を見上げて呟く。

あと10秒、あと7秒、あと3秒、あと1秒。

「よしっ、完成だ！」

午後7時38分　俺は机の上のカップラーメンの蓋ふたを勢い良く開けた。

その瞬間、湯気と共に部屋をカレーの香ばしい匂いが包み込む。

ちなみに、例のカップラーメンのシリーズの中で俺が一番好きなのはカレーだ。

まあ、だからこうして家の中にある数あるカップラーメンの中からカレーを選んでいるのだが。

「相変わらず美味そうだな……よし、いただきまーす」

俺は礼儀作法の一つである食事前の挨拶をすると夕飯であるカップ

ラーメンの容器を手取る。

そして、箸で口にカレーに塗れた麺を加えるとそれを一気に啜って。
すぐ左隣でベランダに通じている大窓が開く音が聞こえた。

「あら、良い匂いね」

「ブッ！」

俺は口に含んでいた麺をスプーンごと全て吹き出した。

「うわっ、ちょっと何やってんのよ！ 汚いわね！」

「ゲホッ、ゲホッゲホッ……だ、誰のせいだと、思って、いるんだよ……！」

ていうか、それ以前に。

「ていうか……お前、どうやってベランダから入って来たんだ」

「さあね。詳しい理屈は話さないけど、私が魔法少女だからじゃない？」

「まだ言ってるのかよ、お前それ……」

つい先ほども、俺はこの少女　ウリアルル＝ブレイザーからそんなトンデモ発言を聞いていた。

有ろう事か、この少女は何の躊躇ちゆうじゆも無く自分の事を“未来からやってきた魔法少女”だと抜かしやがったのだ。

その時、俺はこう思った。

ああ、これは物凄く痛い奴が来たな、と。

だから、俺はこいつをとりあえずもう一度外に閉め出して、ちゃんと玄関に施錠して、夕飯を食べるべく部屋に戻って来ていたのだが。

「ていうか、お前って言わないでよ、ちゃんと名前は教えたでしょ？」

「えーっと……ウリアーロイレイザーだっけ？」

「ウリアール＝ブレイザー！ 人の名前を間違えるなんてどういう事なのよ、あなた！」

「いや、だって、お前みたいな名前なんか今まで覚えた事も無いし……」

ていうか、それ以前に外国人の友人を持った事すら無い。

こいつを外国人の“友人”だと呼んでいいのかは まだ、解らないけれど。

「何か、ややこしいんだよな、外国人の名前って……カタカナだし、パツとしないって言うか」

「あなた、今世界中の名前がカタカナ表記の人に喧嘩を売ったからね？」

「ていうか、実際ウリアーロゥイレイザーの方がカッコ良くね？もういいだろ、ウリアーロゥイレイザーで。いつその事、それに改名しろよ、ウリアーロゥイレイザーに」

「何であなたの意見で勝手に私の名前を改名しないといけないのよこの屑が」

「屑？ お前今俺の事を屑って言ったか！」

「いいえ、言っていないわ、ゴミ屑の聞き間違いじゃない？」

「もっと酷くなってんじゃねーか！」

「ていうか、それを言うならあなたの名前だってややこしいじゃないの。真之乃秀……ああもう、何で“の”が苗字にそれも連結して二つも入っているのよ、殺すわよ」

「いや、先祖代々受け継がれてきた苗字に苛立ちを覚えて俺を殺そうとするな。それは色々間違っているというか、根本的に何かが間違ってるから」

そもそも、殺人予告をする事自体が間違っているのだが。

「真之乃秀、真之乃秀、真之乃秀……ああもう、やっぱり言い辛いわ。ねえ、苗字の“の”を1個少なくしてよ」

「知ってるか？ 苗字と言うものはそんなに簡単に変えられるもの

「じゃねーんだよ」

「良いじゃない、真乃秀の方が私的には結構カッコイイと思うわよ？」

「えっ、マジで?」

自分の苗字を否定される事は少し気に食わないけれど、何だろう、それでもカッコイイと言われる事は嬉しいと言うか、やぶさかではないと言うか、何と言うか。

「まあ、カッコイイというのは嘘なんだけど」

「嘘だったのかよ!」

畜生! 人の心を弄もてあそびやがって!

「鬼! 悪魔! 鬼畜! 人外!」

「ちよっ……な、何なのよ、急に!」

「今が青春の男子高校生の心を弄んだ罪だ! この悪魔!」

「私は弄んでなんかいないわ。勝手に私に弄ばれたあなたが悪いのよ」

「自分の責任を被害者に押し付けるなんて最低だぞお前!」

「ていうか、もうあれね。真之乃なんて呼び難いから……あなたの事はこれから秀って呼ばせて貰うから」

「……………」

さり気無く俺の事を呼び捨てにする事を決定しやがった……。

「さて、ところで秀」

「何だ」

「お腹が空いたわ。私にもそれ作ってよ」

「外で生ゴミでも漁^{あぐ}ってる　って痛^{いた}ってえ！」

脇腹に蹴りを食らった。

加害者の方は言うまでも無く、あいつだ。

上級魔術師？

「何しやがんだ！」

「何で私が生ゴミなんか漁らなきゃいけないのよ！ むしろ、秀がそれを私に譲渡して臭が生ゴミを漁りに行けば良いじゃないの！」

「お断りだね！ 断固としてお断りだね！ せめてこれがシーフードだったらお前にやったかも知れんが、残念ながらこれはカレーだ！ カレーは断固として譲渡しないと俺はこの世に生を受けたその日に神に誓ったんだよ！」

「何よ、そのどうでもいい誓いは！」

「どうでもいいって言うな！ どうでもいいって！ いや、俺も半ばどうでもいいって思っているけれど、他人からどうでもいいって言われると何かイラッと来る！」

「秀もどうでもいいって思ってるんじゃないのよ！」

そんな時だった。

ぐうぐうぐうぐうぐう……。

何か 音が聞こえて来た。

正確は、誰かの腹が鳴る音が。

無論、自分の腹が鳴った事くらい解る為、今の音は俺の腹のもので

はない。

と、言う事は。

「……………！」

ていうか、そんな考えを巡らす前にウリアルル「ブレイザー」が自分から赤面して自らの腹を両腕で抱き抱えるように隠していたので今の腹の音の犯人は一目瞭然だった。

「……………はあ」

「ちよっ、何ため息ついてるのよ！ い、今はっ、そのっ、別にお腹が空いた訳じゃなくて、そんな訳じゃ、なくて、その……………！」

「……………解ったよ」

そう言っつて俺は立ち上がると部屋の扉を開ける。

「ちよっど、何が解って ていうか、どこに行くつもりなのよ」

「……………シーフード」

「……………えっ？」

「シーフード、今から下で作って来るから。その間に、俺のカレー盗み食いするんじゃないぞ」

俺はそれだけを言い残して部屋の扉を閉めようとして 。

「しゅ、秀！」

不意に部屋の中から聞こえて来たウリアルル「ブレイザー」の手に手を止めた。

俺は部屋の中を振り返る。

そこには、先ほどの羞恥による赤面とは明らかに違う 頬を若干赤らめたウリアルル「ブレイザー」の姿があつて。

「……そ、その」

そして、彼女はボソボソと呟くような声でこう言うのだった。

「あ……ありがと、ね？」

「……どういたしまして」

そいつのお礼を初めて聞いたのが嬉しかったのだろうか。

そう言って、扉を閉める俺の顔にはほんの少しの笑みが浮かんでいた。

シーフードのカップラーメンを作った俺はついでにグラスにお茶も注いでトレイにそれらを乗せて部屋まで運んだ。

部屋の扉を開けると同時に、中でウリアール「ブレイザー」が立ち上がるのが見えた。

そこまで腹が減っているという事なのだろうか。

まあ……あれほど大音量で腹の虫が鳴くのを聞いてしまえばそんな事は一目瞭然、と言うよりも、一耳瞭然なのだろうけれど。

「ほらよ、作って来てやったぞ、有り難く食べる」

「あ、ありがと……秀」

「どういたしまして」

俺は適当に彼女に言葉を返しながら机の上に運んで来たトレイを置く。

そこで、俺はとある一つの小さな問題に気付いた。

しまった……彼女にどこで食事をさせるべきか。

「……………」

少し考えた後、俺は先ほどまで食べていたカレーのカップラーメンの容器と箸を持ってベッドの上に腰を下ろした。

「えっ、そこで食べないの？」

「明らかに不法侵入してきているお前に席を譲るのも何かアレだけど……それ以前に、お前は女子だからな。男尊女卑ならぬ、女尊男

卑じゃないが、こういう時は女子を優先させるべきだろ」

さり気無く、今日霧歌から学んだ言葉を使っている俺なのであった。大丈夫、こいつは霧歌の存在までは知らないだろうから、俺が霧歌から学んだ言葉をパクっている事には気付かないはずだ。

「そ、そっか……ふーん」

ウリアール＝ブレイザーの方はまた若干頬を赤らめて 俺に背を向けて、代わりに勉強机と向き合った。

「い、意外と……良い所あるのね、秀って」

「意外で悪かったな」

「……ね、ねえ」

「何だよ、早く食べないとラーメン伸びるぞ」

「秀は……どうして、私の事を名前で呼んでくれないの？」

「さつきも言ったけど、お前が不法侵入者である事も理由の一つだし、お前には失礼かも知れないが……アレだよ、長いんだよな、お前の名前」

「それなら……ウリアで良いわ」

「えっ？」

「う、ウリア……ウリアで、いいから」

「名前で、呼んでよ……」とウリアル＝ブレイザーはこちらに背を向けたままそう頼み込んで来た。

上級魔術師？

「……………」

そして、俺はと言えば、そんな彼女の背中を見上げて　まあ、特にその頼みに断る理由も見付からなかったのだ。

「別に良いけど……………それじゃあ、ウリアって、今度からそう呼べばいいんだな？」

「……………呼んで、くれるの？」

「お前が呼べって言うんだ。仕方ないだろ」

すると、今度はウリアルル＝ブレイザー、もとい、ウリアは嬉しそうな満面の笑みを浮かべてこちらを振り返って。

「秀って、やっぱり意外と良い所あるのね！」

そう、言った。

「だから、“意外と”は余計だっって言ってるだろ。お前は」

「ウ・リ・ア！」

「ウリアは、素直に人を褒めるといふ事を知らねーのか」

「知らない」

「一言であっさりと答えてんじゃねえ」

「ていうか、秀。何かトレイの上にお箸とフォークが乗ってるんだけど……何で？」

「いや、お前見た目外国人っぽかったから、念には念を入れてフォークも持って来てみた」

「フンツ、残念だったわね。私にはフォークなんて要らないのよ」

「そうか。それじゃあ、お前は箸を使えるという事なんだな？」

「使えないわ」

「使えないのかよ！ 何なんだよそのオチは！」

「という訳で、まあ、フォークを持って来てくれたのには素直に感謝するわ。ありがとね、秀」

「最初から箸は使えないって言えばいいのに……」

「ブツブツとそう言いながら俺はすっかり伸び切ってしまったっているカレーのスープに浸かった麺を箸で持ち上げる。」

「……んっ！ これ美味しい！ ねえ、これ美味しいわよ！ 秀、ねえー！」

「解った、解ったから。美味しいのは解ったから黙って食え」

「えーっと、これ“シーフード”って、言うのよね？ 美味しい

わねー、これ。明日もこれを私に譲渡する事を要求するわ、秀」

「要求するわ、じゃねえ。お前」

「だから、ウーリーア！」

「ウリア、お前は一体いつまでこの家に居座るつもりなんだよ」

「決まってるでしょ？ あなたを敵から完全に護り切るまでずーつとよ」

「だから敵って何なんだよ……」

訳が解らん。

何言ってるんだこいつは。

あれだろうか……いわゆる、“設定”というヤツなのだろうか。中二病に掛かっている奴が良く言つと言われている。

まあ、俺も中二病に掛かっている奴と面と向かって出会った訳では無いから良く知らないんだけど。

そして、こいつが　ウリアが、中二病だという可能性も有り得る訳だし。

ひょっとしたら、こいつが初めて面と向かって出会う中二病に掛かっている奴になるかも知れないのかあ……。

……いや、別に嬉しくとも何ともないけれど。

「……………それで？ お前は一体どんな脅威から俺の身を護ってくれんだ？」

「『デュアルシステム サイエンスサイト
混合機関 科学発展側』」

「いや、そんな急に専門用語を使われても一寸たりとも理解が及ばないんだが」

「まあ、秀みたいな頭の中に脳味噌が入っているかどうかどうかも怪しい人の為に簡単に言わせて貰うと」

「簡易的な説明を行ってくれるのは助かるが、どう考えてもその前に一言余計な文章が添付されているのは気のせいか？」

「魔術と科学の二つの文明を合わせた後に、科学側へと更に発展を遂げた機関って事よ」

「……………なあ、それって簡易的な説明なんだよな？」

「えっ……………まさか解らないの？ 今の説明で？」

「ガチで引いてんじゃねーよ！ ていうか、今の説明でお前の話を理解できる奴が居たらここに連れて来て欲しいわ！」

「はあ……………これは、私が来た世界の事から話す必要があるそうね」

「ああ、是非ともそうしてくれ」

とは言うものの、俺はウリアの話信じるつもりは毛頭も無いのだ

が。

だって、どうせ全てが“設定” だろ？

どんなに巧みで壮大で細かな設定を今から語るのか知らないが
まあ、何にしても、俺はこいつの話信じるつもりは無い。

何故なら 有り得ないからだ。

未来だとか、魔術だとか。

そんなものはこの世に存在しないはずのものだからだ。

人間は実際に目の当たりにしたものしか心の底から信じる事は出来
ない。

幽霊とか、UMAとか、UFOとか それらも本当に信じている
とか言う人は居るけれど。

その人でさえもきつとそれらの存在を心の底から認められている訳
では無いのだ。

何故なら 実際に目の当たりにした事が無いから。

だから、俺もウリアが言う未来や魔術の事は一切信じない。

薄情と思われるかもしれないが 人間とはそういうものである。

事件を起こした際に、物的証拠で有罪か無罪かが決まる。

きつと、それと同じ事だろっつから。

上級魔術師？

だから、俺は“そういう志”の下に　ウリアの話をラーメンを啜りながら聞き始めた。

「　私はね？　2056年からやってきたの」

「2056年って……えっと、今が2011年だから、45年後の世界か」

「そうね、45年後の世界」

「45年も　半世紀近く経つと、やっぱり世界も色々と変わっているのか？」

「ええ、変わってしまったているわよ、色々と」

「例えば……どんな所が？」

「世界そのものが変わってしまったわ。まず、2023年に日本の首都圏で大地震が起こったの」

そう言えば　そんな話を俺は聞いた事がある。

今から30年以内に首都圏で大地震が起きる確率が　えっと、何パーセントだっけ？

とにかく、ほぼ100パーセントの確率で起きる、らしい。

これはあくまで予想であり、推測であり、噂なのだが。

「その大地震で首都圏をやられた日本は土地的にも国家的にも壊滅を余儀なくされたわ。そして、日本は藁わらをも縊すがる思いで外国にアメリカに助けを求めた」

「……その結果は？」

「まあ、アメリカも鬼じゃないからね。日本が伸ばしてきた手をちゃんと握り返してくれたわ。えっと、今のアメリカの大統領は……？」

「オバマだよ、バラク・オバマ」

「ああ、そうそう、そのオバマさんは本当に良い人よね」
「どうでもいいけどオバマさんって。」

お前はアメリカ大統領の友達か何かなのか。

まあ、俺も呼び捨てにしているけれど。

「……って事は、2023年 だったか？ その今から12年後の未来には、まだオバマは大統領としてご健在なのか」

「ええ、そうね。その年 2023年にはオバマさんは命を落としてしまうんだけど」

「えっ……何だよ、まさか暗殺とか？」

俺の問いかけに　　ウリアは無言で首を左右に振って。

「　　ハリケーンよ」

と、答えた。

「ワシントンがかつてない規模の大型ハリケーンに飲み込まれたの。ワシントンにはホワイトハウスがあるから　　いや、“あつたから”、オバマさんはそれに飲み込まれて死亡したわ」

「マジか……それは、その、大変だな」

「他人事みたいに言っているけれど、そのハリケーンの被害は秀達　　日本人にも襲い掛かったのよ」

「えっ、どうしてだよ」

「その大型ハリケーンはね、アメリカ国土の殆どを横断して回ったのよ……だから、首都圏の大地震で一時的に避難していた日本人もそのハリケーンに襲われて殆どの人が亡くなったわ」

「そして」とウリアは真剣な表情のまま続ける。

「事態はハリケーンだけじゃ終わらなかつた　　今度は地球上のあらゆる国で地震や竜巻、様々な自然災害が起こったのよ」

「……それじゃあ、世界は」

「だから言ったでしょう？　　世界そのものが変わってしまったって。自然災害は2023年から2025年の2年間に渡って世界中で連

「 続的に発生し続けたわ」

「……………」

いつの間にか 俺はウリアの語りに思わずラーメンを食べる手も止めて真剣に聞き入っていた。

どうしてだろう。

ウリアの語りは全て “設定” のはずなのに。

「それから、2026年 世界の人口も現在の3分の1くらいまで減ってしまったそんな世界で、世界中のあらゆる国々が同盟を結ぶの」

皆で生き残る為の同盟 とウリアは言う。

「自然災害によって、世界は人だけでは無く資源や食糧も失ってしまっていたから……………まあ、同盟は妥当な手段だと“思われていた”わ」

「……………待て、“思われていた”？」

「そう……………同盟を組んだ事が間違いだったの。結び合った契約は意外と簡単に解けてしまうものなのよ」

「それは……………一体、どういう……………？」

「今の戦争や紛争が行われている地域の事を考えればすぐに解るはずよ」

「……ああ」

「そういう事か」と俺は残念そうに呟く。

何となく解った気がした。

幾つもの自然災害が引つ切り無しに襲い掛かって来ていた非日常を切り抜けた後に。

そんな恐怖の日々を過ごした後に。

人々の精神が　まともなはずがない。

自然災害によって愛する人を失った人も居ただろう。

自然災害によってロクに食べ物や飲み物を供給できない日々を過ごした人も居ただろう。

言うなれば　戦争に負けた後の国、だろうか。

そんな荒廃して荒れ果てている国の中で真っ先に起こる事などたかが知れている。

「……紛争が、起こったんだな？」

俺の問いかけに　ウリアは無言で一度頷いた。

「幾ら同盟を結んだ所で、世界中の資源や食糧の数は決まっている
だから、人々は数少ないそれらを求めて、紛争を起こし、それ

はやがて戦争へと繋がり、同盟を組んだはずの世界はやがて2つに分裂したわ」

「そんな時よ」とウリアは俺を真っ直ぐに見つめてこう言った。

「あなたが　秀が、この世に本当の奇跡を齎もたらしたのは」

「……俺が、世界に、奇跡を？」

「秀は　2030年に、かつて地球上で栄えていた文明の一つ『魔術』を復活させたの」

「俺が魔術を……復活？　そんな馬鹿な、俺は単なる平凡な一人の人間だぞ？　ていうか、2030年まで自然災害から生き抜いている事自体も奇跡なのに……そんな俺が、魔術を復活させた、なんて有り得る訳が無い」

「……ねえ、秀？」

そして　ウリアが次に放った言葉に俺は驚愕して目を見開く事になる。

上級魔術師？

「今日 “白い宝石のような何かの欠片” を拾わなかった？」

「……………！」

それを “その事” を聞かれた瞬間、俺は余りに驚き過ぎて一瞬何の言葉も出せなかった。

「……………ウリア、お前どうしてその事を……………知って……………！」

「……………やっぱり、拾ったのね」

「それは鍵よ」とウリアは言った。

「いや、正確には鍵ではないのだけれど 実際は、その欠片は鍵のような役割を果たしたわ。秀の持っているその欠片がかつて栄えていた魔術の文明と共鳴したの」

「それで……………この世に再び、魔術の文明が復活、したのか？」

「そう。秀の手によって魔術は完全にこの世に復活した。火・水・風・雷 様々な力を無限に創造する事が出来るその文明を世界に復活させた事で、戦争は治まるかと思われていたの」

「……………でも、違ったんだな」

「……………さつき、同盟を結んでいた世界が2つに分裂した って、言ってたわよね？」

「ああ」

「世界中で復活した魔術的な文明はさまざまその分裂した2つの世界のそれぞれで活用されたの “兵器”として」

「それで、戦争が更に激化したのか」

「そういう事よ。そして、その分裂した2つの世界 ううん、2つのグループにはそれぞれ名前が付いたわ。科学と魔術を融合させて、更に魔術的に発展したグループ 『デュアルシステム混合機関 魔術発展側』、そして、こっちはさっきも言ったけれど、科学の魔術を融合させて、更に科学的に発展したグループ 『マシックスサイド混合機関 科学発展側』」

「それで、お前の話によると俺は後者の その、科学側に命を狙われているみたいだけど。どうして、俺はそいつらに命を狙われているんだ？」

「元々、グループ同士の戦争で優勢だったのはその科学側だったのよ。科学的にもそっちのグループの方が技術力は上だったから。でも、そんな時に」

「俺が魔術を復活させてしまった って訳か」

「そういう事に……なる、のかな」

「という事は……お前は、その魔術側の人間、という事になるのか」
しかし、俺のその問いかけにウリアは意外にも首を横に振った。

「えっ……それじゃあ、お前は科学側の人間なのか？」

「うっん、それも違う……ていうか、まあ、私はどちらかと言えば魔術側の人間だけど、私はどちら側の意思でも動いていないの」

「私を動かしているのは」とウリアは俺を微笑と共に見つめて言った。

「あなた　　2056年の秀よ」

「……未来の、俺？」

「私は、未来の秀に頼まれて、2056年から過去の秀　　つまり、現代のあなたを護る為に過去にやってきたの」

「……そう、だったのか」

俺はそう呟くと既にもう完璧に伸び切ってしまった　　食べられない事は無いのだが、色々と手遅れなカレーのカップラーメンを床に置くベッドから立ち上がる。

そして、机の引き出しの中から“それ”を　　白い宝石のような何かの欠片を取り出した。

「これが……遠い未来、魔術を復活させる鍵になるのか」

「そっらしいわね。私は初めて見たけれど」

「えっ？」

俺はそのウリアの発言に少し疑問を持った。

「初めて見たって……未来の俺はウリアにこれを見せなかったのか？」

「見せる以前に……私と未来の秀があつたのは、ほんの一瞬だけだから」

「……お前、よくそれで俺の為に過去までやって来れたよな」

「わ、私にも色々あるのよ、色々ね！」

どんな色々があればそこまで知らない赤の他人の為にこんな過去までやって来れると言うんだ。

ていうか、もしもそれが本当なら、意外とこいつ心が寛容なのかも知れなかった。

意外と、だが。

ここ重要ね。

「……ていうか、少し皮肉な話をしてもいいか、ウリア」

「……皮肉な話？」

「ちょっと考えたんだけど……今のお前の話が本当ならさ」

「それって」と俺は自嘲めいた笑みと共にその欠片を見下ろして言う。

「ここで俺とこの欠片がこの世から消えれば　そんな残酷な未来は訪れないんじゃないか？」

「……………はあ」

ため息をつかれた。

ウリアから呆れられたようにため息をつかれた。

あれ、どうしてだろう。今の俺結構真剣な雰囲気と口調で言ったつもりだったのに。

「オイ、ため息をつくとは一体全体どういう事だ」

「やっぱり……………秀は秀、よね」

「あ？」

「未来の　2056年の秀が言っていたのよ。2011年の俺は自己犠牲的な事を言うかも知れないけど見捨てないでやってくれ、ってね」

「……………」

……………流石は俺。

当たり前だが、45年経つてもどうやら俺は俺のようだった。

俺の事をよく熟知していらっしやる。

まあ、他でも無い俺自身の事だから、それは当たり前なのだろうけど。

上級魔術師？

「……そして、未来の秀からは、もう一つだけ伝言があるの」

「……何だ？」

「世界を救って欲しい、だって」

「……」

「この世界の俺には無理だったけど、45年前の俺なら 世界を救い、未来を変えられるはずだって」

「……」

そのウリアの言葉に 正確には、未来の俺からの伝言に俺は再度嘲笑する。

オイオイオイオイオイ。

未来の俺……何を言い出すかと思えば。

お前が俺なら、俺の事をちゃんと解っているはずだろう？

俺は単なる平凡な一般人だ。

そこら辺を適当に歩ければ幾らでも居るような。

映画やドラマで映像の端から端を歩いて消えて行くエキストラみた

いな。

俺の人生においての立ち位置は　そんなものなんだよ。

それなのに　何だって？

世界を救え、だって？

馬鹿げている　ウリアの作り話も、全てが馬鹿げている。

ていうか、それ以前にウリアが今語った話は全て出鱈目てたらめなのだ。

出鱈目で、単なる設定で、妄想で、想像で、幻想で　作り話。

平たく言えば、嘘だ。

そんな作り話に登場した未来の俺からの伝言に頭を悩ませるなんて。
。

それこそ、馬鹿げているではないか。

「……今話した全ての事を、今ここで信じてくれとは言わないわ」

「でもね、秀」とウリアは言う。

「あなたには、どうせこの先、嫌でも今の話を信じなければならなくなる時が来るから……事前に、私がここにやってきた事情だけでも話しておきたかったの」

「ああ……お気遣いありがとな、ウリア。……でも」

……でも。

どんなに気を遣われたって、どんな事情を聞いていたって。

俺は……俺には。

「俺には……世界を救うなんて、未来を変えるなんて、そんな大それた役目を担うだけの器は無いぜ？ 精々、受け止められるのは今の自分の人生くらいだからな。世界がどうか、未来がどうか言う前に、俺は今生きている人生を生き抜くだけでも精一杯なんだから」

「……そうね、そうかもしれない」

「けれど」と。

ウリアは椅子から立ち上がると 俺の前に移動してきて笑みを見せる。

その笑みは理屈も無く心が何だか落ち着くような そんな笑顔で。

「だからこそ……私が、秀が受け止めきれないものを代わりに受け止める為に、未来からやってきたのよ？」

「……ウリア」

俺がウリアの名前を呟いた時だった。

不意に、ウリアが何かの気配を察知したように急に目の色を変えて

ベランダに通じる大窓を　その向こう側に広がる景色を振り返った。

外にはいつの間にか夜の帳よのつが下りていた。

まあ、夕飯を食べ始めた時点で既に時刻は午後8時を回っていたから　それは当然の事だろう。

「……オイ、ウリア、どうかしたのか？」

「……秀」

「ちょっと来て」と俺はウリアから手を掴まされると引っ張られる形でベランダへと強制的に出さされた。

「オイ……本当にどうしたんだよ」

俺はウリアに問いかける　しかし、ウリアは何も無い夜空を頻しきりに見渡していて俺の問いかけには何も答えない。

本当に何があっただ……。。

俺がうんざりした心境と共に心の内でそんな事を呟いた時だった。

不意に　本当に何の前触れも、音も、相図も無く。

俺の手の中で　その欠片が白く発光したのだ。

魔導獣機

「な、何だよ、これ……！」

突如、俺の持つペンの形状をした欠片から放たれた白い光に　流
石に恐怖はしなかったが、純粹に俺は驚いた。

しかし、俺の隣に居るウリアはどこと無く冷静な口調で。

「やっぱり……！」

納得したように呟いて　再度夜空を振り仰いだ。

俺も訳の解らないままウリアに続いて夜空を見上げる。

今夜は雲一つない快晴だった。

いや、夜なので快晴という言葉が正しいのかどうか解らないが
とりあえず、雲一つない、満天の星と綺麗な月の拝める申し分無い
夜空だった。

そして。

そんな夜空が　景色が不意に“歪んだ”。

「えっ……！」

無論、歪み始めた景色に啞然とした声を上げたのは俺だ。

歪みを帯びた景色は更に歪みを重ねて、捻れて渦を巻き。

最終的に夜空よりも黒い漆黒の穴を創造した。

「……来る」

そして、俺は漆黒の穴を仰いだままそう呟いたウリアの声を聞き逃さなかった。

「えっ、来るって、一体何がだよ」

俺のその問いかけにウリアは勇敢にも　いや、勇敢とは呼べないかも知れないが　その場で跳び上がってベランダの手摺の上に着地した。

「秀！　掴まって！」

俺はウリアから差し出された手を言われるがままに掴む。

すると、信じられない話だがウリアは俺の体を片腕で軽々と持ち上げた。

それが魔術の力なのか　それとも手首の辺りに装着されている機械の仕業なのか。

それは解らなかったが。

とにかく、ウリアは俺の体をまるで発泡スチロールのように軽々と持ち上げるとそのまま自身の体に押し付けるようにして抱き締めた。

「オ、オイ、ちよつ、お前……！」

まあ、そのウリアの行動によって俺の顔は必然的にライダースーツのようなぴっちりとした服装によって強調されたウリアの谷間に埋まる訳で。

ていうか、こいつ意外と胸大きいんだな。

スーツで強調されているからだろうか。

下手すると霧歌クラスのバストを持ち合わせているのかもしれない。

霧歌もアレで意外と大きいからなあ。

「秀！」

「は、ハイッ！」

不意にウリアから名前を呼ばれた俺は邪な想像がウリアに伝達してしまったのかと焦って思わず裏返った声を発してしまった。

「この近くに、どこか……えっと、広い場所はある!？」

「何だよ、いきなり！ つーか、何そのアバウトな質問は！」

「いいから！ どこでもいいから答えて！ 出来るだけ人が居ない所！」

「そ、それなら……確か、近くに海岸があったはずだ！」

「海岸　海の事ね、解った！」

どうして、ウリアが今そんな質問を俺にしてきたのか。

そんな疑問を考える余裕も無く　次の現象が起こった。

何と、ウリアの足元に赤く光るいわゆる“魔方陣”のようなものが出現したからだ。

そして、きつとその魔方陣の効力なのだろう。

次の瞬間、ウリアの背中から深紅の炎の翼が生えて来た。

「ウリア……お前……！」

「しっかり掴まってね、秀！」

ウリアはその炎の翼を使ってベランダから空中へと飛び上がる。

それから、俺を抱えたウリアが屋根よりも高い位置に辿り着いた所で。

俺は　見た。

夜空に空いた漆黒の穴から出て来る　その“巨大な生物”を。

しかし、俺はその謎の生物の姿をハッキリと捉える事は出来なかった。

何故なら、その時には既にウリアが“飛行”を始めていたからだ。

一口に飛行とは言っても、ハングライダーとかパラグライダーとかそんな娯楽的なものでは決して無かった。

飛行中　周囲の景色が“歪んで見えた”。

それほどの速度で俺達は飛んだという事なのだろう。

人間の体は音速には耐え切れないという説があったような気もするが　俺の体は大丈夫なのだろうか？

しかし、そんな心配は無用だったようで。

俺がそんな疑問を感じ始めた頃には俺達は海岸の上空へと到着していた。

ウリアは深紅の炎の翼を羽ばたかせ　段々と降下していき、俺を砂浜の上に下ろした。

俺の顔がウリアの胸の谷間から離れる。

正直、もう少しあのまま飛行を続けていたかった　とは決して言わない。

広い場所と言われてハワイ沖を指定すれば良かったとも決して思っていないから。

変な下心は無いから。だって俺は紳士だもの。

ジェントルマンだもの。

「……大丈夫、心配しないで、秀」

そして、ウリアはそう言いながら 砂浜に俺を残して一人ゆっくりと上昇を開始した。

炎の翼を携えて夜空へと吸い込まれるようにして昇って行くウリアの姿は。

「私が……秀の事を、護るから」

まるで 天使のように思えた。

魔導獣機？

しかし、俺はそんな錯覚　　と言うよりも、幻覚から一気に解き放たれる。

ウリアが飛んでいる高度よりも遙か上空を猛スピードで巨大な“何か”が飛び去った。

その巨大な“何か”は海上で旋回するとまたこちらに戻って来た。

かなりの速度で飛行しているのだろう　　その巨大な“何か”が通った後、少し遅れて海面がまるで爆発したかのように水飛沫を上げた。

そして、その巨大な“何か”は俺とウリアの目の前で急停止する。

その巨大な“何か”に纏わり付いていたのだろう　　それが停止した瞬間、凄まじい突風がこちらに向かって襲い掛かってきた。

舞い上がる砂塵　　俺は目を瞑ると同時に片腕を文字通り目の前に持って来た。

段々と消滅していく砂塵。

完全にそれが消えた頃を見計らって俺は目を開けると　　上空に佇んでいる“それ”を仰いだ。

“それ”の体は　　“その生物”の体は全てが金属で構成されているようだった。

月明かりを反射している所を見るとおそらくはそんなのだろう。

そして 俺の予想では“その生物”は“機械”だ。

それならば、それは“生物”ではなく“機械”じゃないか そう
思うかもしれない。

だが、実際目の当たりにするとその見解はやはり“生物”に落ち着
くだろう。

その“機械”染みた“生物”は 途轍もなく巨大な鳥の形をして
いたのだから。

動きもかなりリアル まるで、“本物の鳥のように”動いている。

空中で停止しておく為に一定の間隔で羽ばたく灰色の鉄製の翼。

同じく鉄製の尾も翼が動くリズムに合わせて左右に揺れている。

ライトでも仕込んであるのだろうか 本来、目が有るべき場所
は黄色い光があった。

「……………私が相手よ」

そう言って、ウリアはその鉄製の鳥の顔と同じ高さまで飛翔する。

「秀には……………指一本触れさせない」

そして そのウリアの挑発に対抗するように。

その鉄製の鳥は 鳴いた。

鳴いたとは言っても、凄まじいノイズを放っただけなのだが。

思わず耳を押さえたいくなるようなそんなけたたましいノイズを。

その空間をも歪ましてしまいそうなノイズが解き放たれた瞬間、ウリアは凄まじい速度で海上へと移動し始めた。

その動きを目で 正確には黄色いライトで追う鉄製の鳥。

海上の上空に辿り着いたウリアは停止して鉄製の鳥と向き合う。

その直後だった。

不意に鉄製の鳥がその巨大な口を開けて そして。

どこからとも無く一瞬で集約させた光の束を凝縮させた光の弾をウリア目掛けて解き放った。

しかし、挑発するだけあってウリアもその弾に易々と当たるつもりは毛頭も無いらしい。

ウリアは光速で 冗談抜きで光の速度で迫ってきたその弾をいとも容易く躲す。

標的を失った光の弾は水平線上の彼方まで飛んで行き 。

海の果てで大爆発を起こした。

海の果てが一瞬だけ昼間になった　それほどの光が遙か水平線上の彼方で解き放たれたのだ。

そして、その光よりもワントンポ遅れて台風の時でもここまで酷くは無いと思える突風が俺の立っている砂浜を襲った。

あれほどの距離からここまで威力の風が吹き荒れるくらいである。

あの爆発の衝撃で津波が押し寄せて来る可能性もありそうだ。

それから、俺はウリアと鉄製の鳥との戦闘へと視線を向ける。

しかし、向けられたのは視線だけで実際には速過ぎて殆ど視界に捉える事は出来なかった。

時折、どちらかが更なる加速をする為に空中で一旦停止するくらいで。

それ以外はウリアも鉄製の鳥も、俺はその姿を捉える事すら出来なかったのである。

どちらが優勢なのだろう。

俺がそんな事を思った時　光速の戦闘が繰り広げられている上空で何かオレンジ色の光が一瞬だけ光った。

そして。

おそらく、あの鉄製の鳥の片翼と思われる鉄の塊が砂浜に落下して

きた。

「ちよっ……うおおおおおっ!？」

俺は間一髪、砂浜に飛び込む形で落下してきたその巨大な翼を避け切る事が出来た。

「あ、危ねえ……死ぬかと、思った……!」

ていうか……うん、俺を助けてくれるのは物凄く嬉しいのだけれど。

ウリア、翼を落とす場所をもう少し考えて下さい、マジで。

そんな地味に九死に一生を得た俺はそれを教訓に砂浜の端の方へと急いで移動する。

そして、その俺の行動はどうやら正解だったらしく。

俺が移動した直後にすぐさまもう片方の鉄の翼が落下してきた。

その翼も轟音を発しながら落下した際に地震並みの揺れを大地に齧した。

「……………」

ていうか、両方の翼を^もがれてしまったら流石に飛べないのではな
いか。

俺がそんな素朴な疑問と共に夜空を見上げた瞬間 本^ま当にその瞬
間。

今度は本体が砂浜に落下してきた。

それと共に翼とは比べものにならないほどの轟音と、揺れと、砂塵が俺に襲い掛かる。

舞い上がった砂塵の向こう側に　俺はオレンジ色の光を捉えた。

そして、その砂塵が晴れて行く中で俺はその光の正体が鉄製の鳥の本体の上に仁王立ちするウリアが持つ炎の剣だと気付く。

ウリアはその炎の剣の切先を鉄製の鳥に向けたまま　最期にこう言った。

「　バイバイ」

ウリアが相手へと贈ったその言葉は単なる別れの挨拶だったのか、それとも単なる皮肉の言葉だったのか。

何にせよ。

ウリアはそう言って炎の剣を鉄製の鳥の胸に深々と突き刺した。

魔導獣機？

断末魔めいた凄まじいノイズをその口から発する鉄製の鳥。

すると、どういう理屈か、鉄製の鳥のその全てが一瞬にして劫火に呑まれた。

鉄製の鳥の顔も、胴体も、尾も、？がれた翼でさえも。

その全てが　一瞬にして炎に包まれて。

消失　いや、焼失、した。

跡に残ったのは深紅の炎の翼を背に生やしたウリアだけだった。

それは一瞬の戦いだった。

呆気無いとも言って良い。

けれど　俺にとって、ウリアにとって今の戦闘は命を懸けた戦闘なのだ。

その戦いに何か“別のもの”を求める方が間違っているのだろう。

俺がそんな事を思っているとウリアがこちらに歩いて来るのが見えた。

ウリアの手に握られていたオレンジ色の光を放つ炎の剣はこちらに向かって来る途中にただの炎となって空中に霧散した。

そして、俺の前にやってきたウリアは得意気な笑みと共に腕組みをしてこう言った。

「……………何か言う事は？」

……………そんなもの。

お前に今言うべき事なんて一つしか無い。

「……………お前って、意外と胸デカいんだな」

「キーツクツ！」

「痛ってえ！」

ウリアから蹴られた。

また脇腹を今度は全力で蹴られた。

ていうか、威力が強過ぎて俺はそのまま砂浜の彼方まで吹き飛ばされた。

「ぐ、ぐふっ……………！」

俺は蹴られた脇腹の辺りを押さえながらその場に立ち上がる。

つか、俺の脇腹ちゃんとご健在だよな？

蹴られた衝撃で抉られていないよね？

「秀　　っ！」

すると、50メートルほど向こうから怒りに満ち溢れたウリアの声
が飛んできた。

「こっちは決死の覚悟で秀の為に戦ったのに、戦闘後に私に掛ける
言葉が私の胸の感想って一体全体どういう見なのよ　　っ！」

「スマン！　お礼を言うべき場面はあそこだと思ったんだよ！」

「この変態！　バーカ！　秀みたいな変態はもうここから歩いて帰
ればいいのよ！」

「えっ　あつ、オイ！　ちょっと待て！　ウリア！」

俺の呼び止める声も空しく　　夜空の彼方へと消えて行く深紅の光。

っ！か、ウリアの奴、マジで俺だけ置いて帰りやがった……。

「……口は災いの元、か」

今度から真剣な場面ではボケないようにしよう。

俺は先人達が遺してくれたその言葉の意味を噛み締めながら、自宅
へと何とか辿り着く為に歩き出す。

ちなみに、この後俺はちゃんと家に帰り着く事になるのだが……。

5時間くらい掛かった。

マジで足が棒になるかと思った。

翌朝 俺は携帯の画面に表示された『13:12』という時間に
驚愕してベッドから跳び上がるように起床した。

「遅刻 ってああ、何だ、そう言えば今日から夏休みか」

7月28日。

“昨日の事”で 何かもう日付が1週間くらい過ぎてしまっ
てい るような気がする。

偶然拾った宝石のような白い何かの欠片。

突然この家を訪れた金髪碧眼のツインテールの少女。

その少女から聞かされたとんでもない未来の話。

突如、俺の前に現れた機械の怪物。

そして、それをいとも容易く 容易過ぎるほどにあっさり倒し
て見せたウリア。

「昨日の事が全て……夢だったらいいんだろっけど」

そう言いながら、俺は何故かベッドの傍でうつ伏せに行き倒れている少女　ウリアを見下ろして現実逃避すら不可能な事に気付いた。

「……オーイ、その金髪の少女」

「……何よ、秀」

「お前、特徴の一つであるツインテールはどうした」

「それよりも今は聞くべき事があるでしょーが！」

ガバツと昨日の戦闘ではないが光の速度で起き上がったウリアは涙目で俺の眼前まで顔を近付けてきた。

「どうして！　私が！　ここで！　行き倒れて！　いるのかとか！」

「いや、それも気になったんだけどさ。それよりも俺はお前の髪型の方が気になったから」

「部屋の中でまでツインテールはしなくていいって思ったのよ！　ほら私は秀の質問に答えたわ！　だから昨日の“しーふーどー”を出しなさいよ！」

「待て、その等価交換はおかしいだろ」

ていうか、まず等価交換すら成立していない。

「解ったよ……とりあえず、腹が減ったって事で良いんだよな？」

「当たり前よ……だって秀、何か昼まで起きないんだもん、死んじ

やったのかと思ったわ」

「俺を勝手に殺すんじゃないわねえ」

「だって秀、私がこんなにお腹空いてるのに昼まで起きないんだもん、殺してやるうかと思ったわ」

「さっきとは別の意味で俺を勝手に殺すんじゃないわねえ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7335x/>

ボディガードは魔法少女

2011年10月20日04時09分発行